首都圏中央連絡自動車道
埋蔵文化財調査報告書30

－長南町茗荷沢遺跡・竹ノ谷横穴群，
茂原市・長南町八幡下塚群－

平成28年3月

国土交通省　関東地方整備局

公益財団法人　千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道
埋蔵文化財調査報告書30

－長南町茗荷沢遺跡・竹ノ谷横穴群，茂原市・長南町八幡下塚群－

序　文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県教育振興財団調査報告第756集として，国土交通省による首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した長南町茗荷沢遺跡・竹ノ谷横穴群，茂原市・長南町八幡下塚群の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，古墳時代の横穴や中近世の塚などが検出され，この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成28年３月

公益財団法人　千葉県教育振興財団
理事長　　堀　田　弘　文

凡　例

1　本書は，国土交通省による首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡の所在地・遺跡コードは，以下のとおりである。

茗荷沢遺跡

茗荷沢砦跡	長生郡長南町茗荷沢232-1ほか	（遺跡コード　427-004）
福田横穴群	同上	（遺跡コード　427-005）
竹ノ谷横穴群	長生郡長南町茗荷沢字竹ノ谷456-4	（遺跡コード　427-008）
八幡下塚群		
A区	長生郡長南町坂本字地蔵前3348-2番地ほか	（遺跡コード　427-006A）
B区	茂原市石神字小金谷23番地ほか	（遺跡コード　427-006B）

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，国土交通省の委託を受け，公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は，第１章に記載した。

5　本書の執筆・編集は，主任上席文化財主事 井上哲朗，上席文化財主事 田村　隆が担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所，茂原市教育委員会生涯学習課，長南町教育委員会生涯学習課の御指導・御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は以下のとおりである。

第１・12図　国土地理院発行　1/25,000地形図

「海士有木」（NI-54-19-16-1）（平成10年発行），「茂原」（NI-54-19-16-3）（平成17年発行）

「鶴舞」（NI-54-19-16-2）（平成17年発行），「上総一ノ宮」（NI-54-19-12-2・4）（平成10年発行）

第２・３図 長南町役場発行　長南町管内図　1:2,500　10（平成６年発行）・14（平成元年発行）

第４・14図　参謀本部陸軍部測量局　1/20,000迅速側図「長南驛」・「大多喜」（明治19年版）

第10図　国土交通省千葉国道事務所作成　圏央道建設予定地測量図を元に加筆

第13図　長南町役場発行　長南町管内図　1:2,500　7（平成元年発行）

8　本書で使用した航空写真は，以下のとおりである。

図版１　京葉測量株式会社による昭和53年撮影写真

図版６　同社による昭和47年撮影写真

9　本書で使用した座標の基本は日本測地系であるが，一部には世界測地系を併記した。図面の方位はすべてその座標北を示す。

目　次

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の経緯と経過…… 1
　第２節　調査の概要…… 2
第２章　茗荷沢遺跡…… 6
　第１節　遺跡の位置と環境…… 6
　第２節　茗荷沢砦跡…… 8
　第３節　福田横穴群…… 8
第３章　竹ノ谷横穴群…… 13
　第１節　遺跡の位置と環境…… 13
　第２節　遺構…… 13
第４章　八幡下塚群…… 16
　第１節　遺跡の位置と環境…… 16
　第２節　Ａ区…… 21
　第３節　Ｂ区…… 29
第５章　まとめ…… 37

報告書抄録…… 巻末

挿図目次

第１図　若荷沢遺跡ほかの位置と周辺遺跡
第２図　若荷沢遺跡ほか周辺地形図（１）
第３図　若荷沢遺跡ほか周辺地形図（２）
第４図　若荷沢遺跡ほか周辺地形図（３）
第５図　若荷沢砦跡全体図
第６図　若荷沢砦跡SK-001
第７図　拡張区遺物分布状況
第８図　若荷沢砦跡出土遺物
第９図　福田横穴群ST-001
第10図　竹ノ谷横穴群周辺地形図
第11図　竹ノ谷横穴群土坑
第12図　八幡下塚群の位置と周辺遺跡
第13図　八幡下塚群周辺地形図（１）
第14図　八幡下塚群周辺地形図（２）
第15図　A区遺構配置図
第16図　A区SM-001・002平面図・土層断面図
第17図　A区SM-003・004平面図・土層断面図
第18図　A区出土土器類
第19図　SM-005・006平面図・土層断面図
第20図　B 区遺構配置図
第21図　B 区SM-001 平面図・土層断面図
第22図　B 区SM-002平面図・土層断面図
第23図　B 区SM-001・002 出土銭貨
第24図　B 区SM-003平面図・土層断面図
第25図　B 区SM-003出土遺物

表 目 次

第１表　A区出土土器類観察表
第２表　B区出土銭貨計測表
第３表　B区SM-003出土陶磁器観察表
第４表　B区SM-003出土土製品・石製品観察表

図版目次

図版１
若荷沢遺跡・竹ノ下横穴群周辺航空写真（1978年）

図版２　若荷沢遺跡（若荷沢砦跡）
（１）調査前
（２）拡張区土層・遺物出土状況
（３）SK-001半裁
（４）SK-001
（５）出土遺物

図版３　若荷沢遺跡（福田横穴群）
（１）調査前
（２）周辺伐採・清掃後
（３）調査前内部
（４）北側隣接区トレンチ
（５）北側隣接区トレンチ内Ｄライン土層
（６）北側隣接区トレンチ内Ｃライン土層
（７）ST-001前トレンチ内Ｂライン土層
（８）ST-001前トレンチ内Ａライン土層 入口付近

図版４　若荷沢遺跡（福田横穴群）
（１）ST-001全景
（２）ST-001近景
（３）ST-001奥炭化物堆積

図版５　若荷沢遺跡（福田横穴群）・竹ノ下横穴群
（１）福田横穴群ST-001入口横断面B-B'
（２）ST-001内トレンチA-A'土層入口寄り

（3）ST-001内トレンチA-A'土層中央付近
（4）ST-001内トレンチA-A'土層奥
（5）竹ノ下横穴群 調査風景
（6）竹ノ下横穴群 全景
（7）SK-002
（8）SK-001

図版6　八幡下塚群
八幡下塚群遺跡周辺航空写真（1972年）

図版7　八幡下塚群 A区
（1）A区遠景
（2）A区調査前近景
（3）A区南側地点調査前近景

図版8 八幡下塚群 A区
（1）SM-001 調査前
（2）SM-001 盛土状況（1）
（3）SM-001 盛土状況（2）

図版9 八幡下塚群 A区
（1）SM-002 調査前
（2）SM-002 盛土状況（1）
（3）SM-002 盛土状況（2）
（4）SM-002 盛土状況（3）
（5）SD-001・002

図版10 八幡下塚群 A区
（1）SM-003 調査前
（2）SM-003 盛土状況
（3）SM-004 調査前

図版11 八幡下塚群 A区
（1）SM-004 盛土状況
（2）SM-005 調査前（奥はSM-006）
（3）SM-005 盛土状況（1）
（4）SM-005 盛土状況（2）

図版12 八幡下塚群 B区
（1）B区調査区遠景
（2）SM-001（奥）・SM-002（手前）
調査前近景
（3）SM-001調査前

図版13 八幡下塚群 B区
（1）SM-001堆積状況（1）
（2）SM-001堆積状況（2）
（3）SM-001盛土除去後
（4）SM-002 調査前

図版14 八幡下塚群 B区
（1）SM-002 北側堆積状況
（2）SM-002 南側堆積状況
（3）SM-002 北側表土除去後
（4）SM-002 南側表土除去後
（5）SM-003 調査前

図版15 八幡下塚群 B区
（1）SM-003 遺物出土状況
（2）SM-003 盛土状況 南北土層北半
（3）SM-003 盛土状況 南北土層南半（1）
（4）SM-003 盛土状況 南北土層南半（2）
（5）SM-003 東西土層東半
（6）SM-003 盛土除去後全景

図版16 八幡下塚群 出土遺物 1
（1）A区出土遺物
（2）B区出土磁器碗
（3）B区出土陶器鉢

図版17 八幡下塚群 出土遺物 2

第１章　はじめに

第１節　調査の経緯と経過（第１～３，12・13図）

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は，都心から半径約40km～60kmの位置に計画された延長約300kmに及ぶ環状の自動車専用道路である。圏央道の整備により，首都圏の道路交通の円滑化，沿線都市間の連絡強化と，沿線の地域づくりの支援・活性化，災害時などの代替路としての機能，年間CO_2の削減など環境改善といった役割を担う。千葉県内の全体延長は約95kmである。

千葉県区間のうち，茂原～木更津間は28.4kmで，平成元年８月に基本計画区間となり，平成７年３月に都市計画が決定され，平成９年２月には整備計画区間となった。平成10年度から用地買収が開始され，平成12年度から工事が着工された。このうち，木更津JCT～木更津東IC間（約7.1km）は平成19年３月に開通した。

事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについては，国土交通省千葉国道事務所及び関係諸機関と千葉県教育庁教育振興部文化財課が協議した結果，事業計画の変更が難しいことから，止むを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。国土交通省は，千葉県教育委員会の指導により，調査機関の指名を受けた財団法人千葉県文化財センター（平成24年度より公益財団法人千葉県教育振興財団）と委託契約を締結し，発掘調査を実施することになった。

千葉県内の圏央道建設事業の内，神崎IC～大栄JCT間が常総国道事務所，大栄JCT～松尾・横芝IC・東金IC～木更津JCT間が千葉国道事務所が担当し，一時期東金IC～茂原北IC間は東日本高速鉄道株式会社が担当しており，３事業として進められた。東金IC～木更津東IC間の発掘調査は平成23年度に終了し，平成25年に開通し，平成26年度までに調査報告書が25冊刊行されている。平成27年度からは，東金～木更津間の残る整理作業～報告書刊行を一括して首都圏中央連絡自動車道（東金～木更津）に伴う埋蔵文化財調査として実施している。

本書で報告する茗荷沢遺跡・竹ノ谷横穴群・八幡下塚群は，茂原市・長生郡長南町に属し，茂原北IC～木更津東JCT間の東部にあたる。茗荷沢砦跡以外の遺跡は，事業範囲の踏査により新規に発見されたものである。調査組織・発掘調査期間・担当者などは以下のとおりである。

（発掘調査）

平成20年度

調査研究部長 大原正義

中央調査事務所長 折原　繁

茗荷沢遺跡（茗荷沢砦跡・福田横穴群）

調査期間　　平成20年９月16日～平成20年11月７日

調査面積　　（規模）7,500㎡　（確認調査）上層270㎡／7,500㎡

（本調査）横穴１基

調査担当者　　上席研究員　川勝里文

八幡下塚群　A地点

調査期間　　平成20年11月10日～平成20年12月18日

調査面積　（規模）1,700㎡　（確認調査）上層182㎡／1,700㎡
（本調査）塚５基
調査担当者　上席研究員　川勝里文

八幡下塚群　B地点

調査期間　平成20年12月19日～平成21年２月13日
調査面積　（規模）2,000㎡　（確認調査）上層210㎡／1,700㎡
（本調査）塚２基
調査担当者　上席研究員　川勝里文

平成21年度

調査研究部長　大原正義
中央調査事務所長　折原　繁

竹ノ谷横穴群

調査期間　平成22年３月17日～平成22年３月18日
調査面積　（本調査）1,500㎡
調査担当者　中央調査事務所長　折原　繁

（整理作業）

平成27年度

整理課長　岸本雅人

茗荷沢遺跡

整理期間　平成27年４月１日～５月18日
整理内容　水洗・注記・接合等・実測・拓本・挿図・写真撮影・写真図版・原稿執筆
整理担当者　主任上席文化財主事　井上哲朗

竹ノ谷横穴群

整理期間　平成27年５月18日～６月15日
整理内容　挿図・写真撮影・写真図版・原稿執筆
整理担当者　主任上席文化財主事　井上哲朗

八幡下塚群

整理期間　平成27年４月１日～６月30日
整理内容　水洗・注記・接合等・実測・拓本・挿図・写真撮影・写真図版・原稿執筆
整理担当者　上席文化財主事　田村　隆

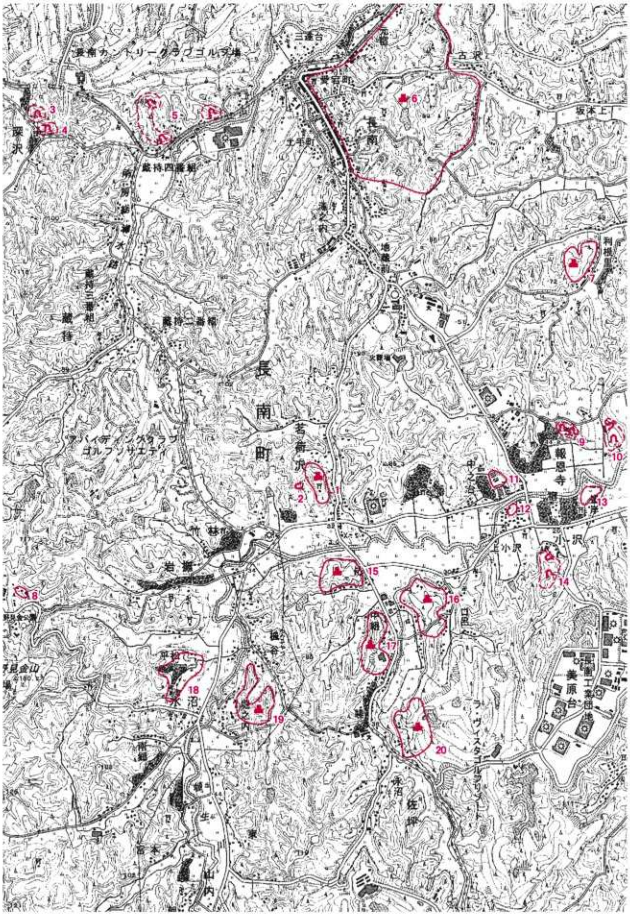
第２節　調査の概要

茗荷沢遺跡（第３図）

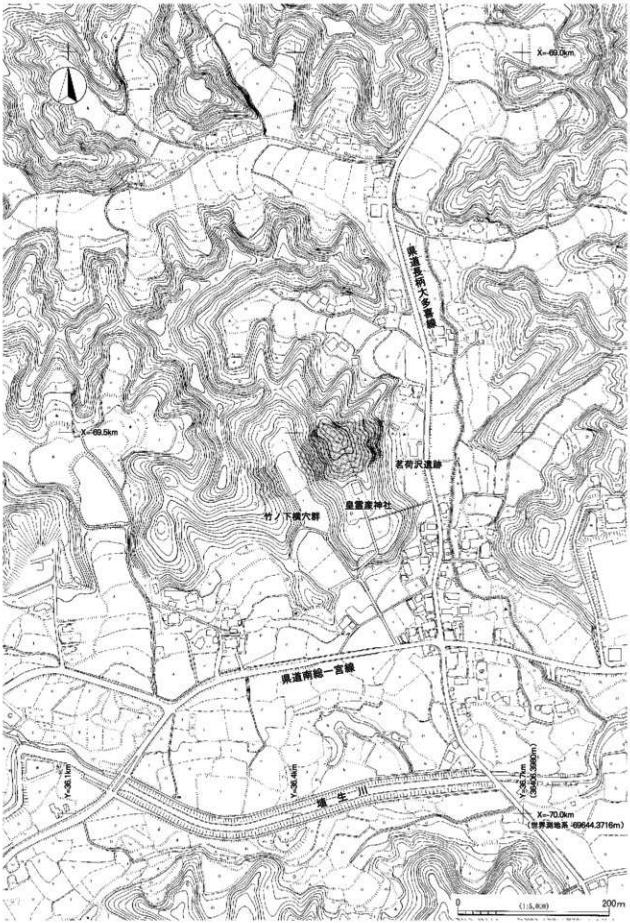
茗荷沢砦跡とその範囲内に存在する福田横穴群の２遺跡を同時に調査した。

茗荷沢砦跡　中世城館跡と推測されているが，縄文時代早期・前期土器群が出土したトレンチを拡張した結果，縄文時代前期とみられる土坑が１基検出された。

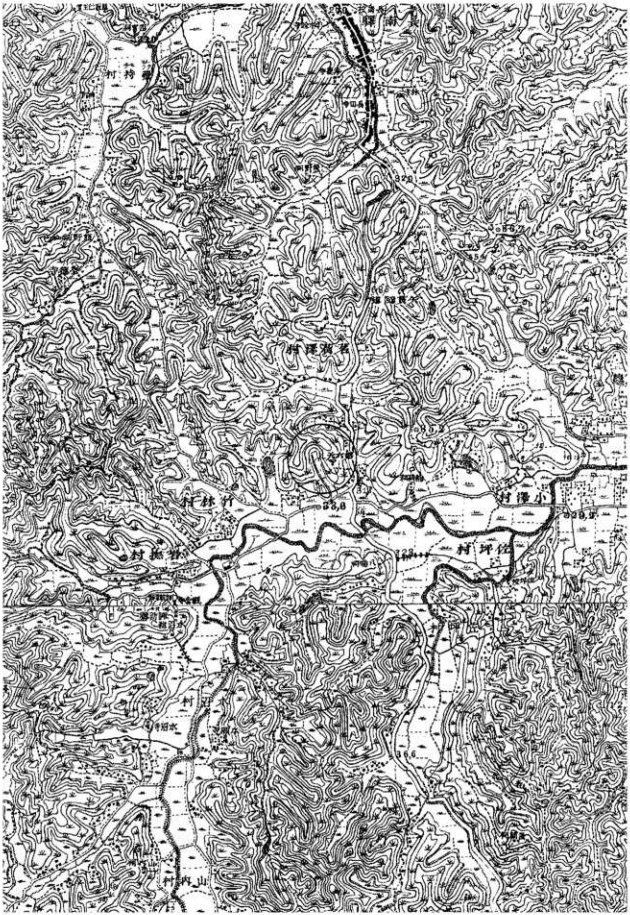
福田横穴群　東側斜面部に２か所並んで開口した横穴が，開口部の崩落により埋没した１基の近世・近



第１図　若荷沢遺跡ほかの位置と周辺遺跡



第２図　若荷沢遺跡ほか周辺地形図（１）



第３図　茗荷沢遺跡ほか周辺地形図（２）（明治時代　1/20,000）

代炭窯であることが確認されたが，古代横穴を改造した可能性が考えられる。

竹ノ谷横穴群（第９図）

茗荷沢遺跡の西側谷津を挟んだ丘陵斜面に２基の中・近世の土坑が検出された。

八幡下塚群（第13図）

事業範囲内の内，丘陵頂部に連続して並ぶ高まりの内，東方の長生郡長南町に属する範囲に連続して確認された６か所の高まり及び周辺部をA地点，西方の茂原市に属する範囲に確認された３～４か所の高まり及び周辺部をB地点として調査した。急斜面の尾根上に位置するため，安全柵を設置して調査を実施し，A地点では直径５ｍ～６ｍの５基，B地点では直径６ｍ～８ｍの２基の中・近世の塚が確認された。また，A地点の塚の盛土下から方形周溝遺構１基，溝状遺構１条が検出され，前者は古墳時代，後者は中・近世のものと推測される。

第２章　茗荷沢遺跡

第１節　遺跡の位置と環境（第１～３図，図版１）

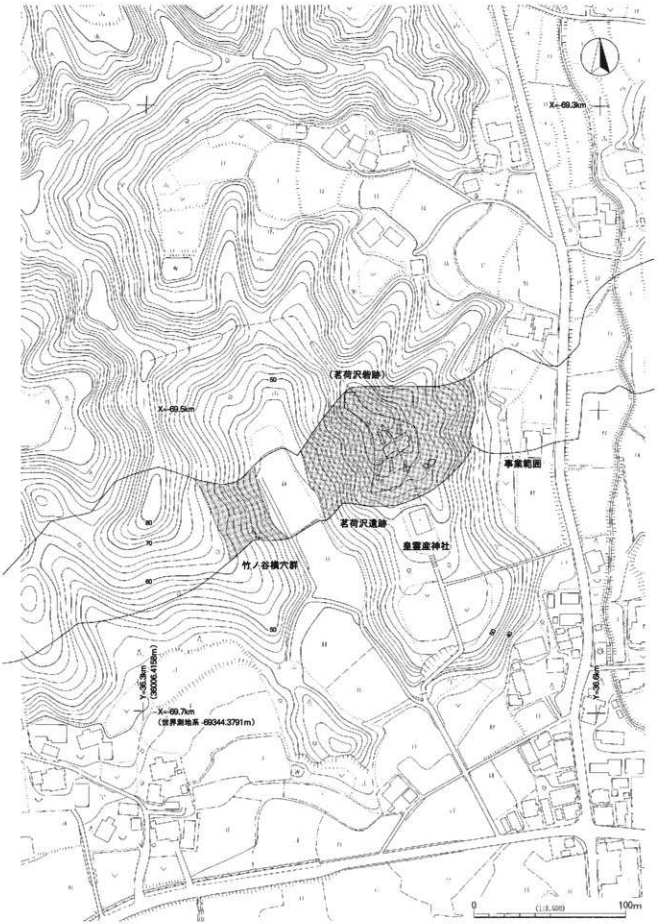
茗荷沢遺跡と第３章の竹ノ谷遺跡群は小谷津を挟んで近接しているので，両遺跡の周辺の環境について記す。長生郡長南町の南部に位置し，周囲は埴生川によって浸食され形成された樹枝状谷津が展開する，標高70ｍ～80ｍの丘陵地帯である。

茗荷沢砦跡は南北300ｍ・東西150ｍ程，標高38ｍ～77ｍの丘陵全体が遺跡範囲であり，福田横穴群はその東側斜面部の標高58ｍ前後に位置する。

周辺の遺跡は，開発が盛んではないため発掘調査歴も少なく，分布は粗である[1]。

縄文時代は，野見金遺跡（早期・前期・中期）(８)・神廻遺跡（後期）(18)と少ないが，神廻遺跡では丘陵裾部で縄文時代後期の集落が検出されており[2]，丘陵地帯の全時代の集落のあり方を示すものといえよう。古墳時代は，横穴群が深沢横穴群(３)・大関谷横穴群(４)・三途台横穴群(５)・報恩寺横穴群(９)・滝ノ谷横穴群(10)・小沢横穴群(14)と横穴墓群が分布し，近辺ではマウンドを有する古墳は存在しない。横穴は長生地域では少ない傾向であり，崩落しやすい岩盤が起因するものと推測されている[3]。集落（包蔵地）は野見金遺跡(８)・上小沢遺跡(12)・神廻遺跡（後期）(18)と，茗荷沢遺跡近辺にはみられず，北部や東部の沖積地がやや開けた地域に集中する。

中世では，茗荷沢砦跡(１)・長南城跡(６)・利根里城跡(７)・上野城跡(15)・御所前砦跡(16)・古御所城跡(17)・堀ノ内城跡(19)・佐坪砦跡(20)と城館跡が多く分布する。当地域は，14世紀前葉には茗荷沢南方の「佐坪」が足利尊氏から鶴岡八幡宮に寄進されている[4]。戦国時代は15世紀前半の鎌倉公方と関東管領の対立を契機とした享徳の大乱等の争乱の中，甲斐国から入部した武田氏の本城長南城が存在し，不確実ながらその前段階の千葉氏系とみられる長南氏の存在も比定されている[5]ので，それらの関連城跡と考えられる。第１図の範囲では，長南城跡・利根里城跡・堀ノ内城跡が腰曲輪を多く配置させる構造であり[6]，ほか上野城跡に土塁・空堀が，古御所城跡に土塁が，佐坪砦跡に空堀が確認されている[7]。茗荷沢砦跡も含めて直径約２㎞の範囲に６か所の城館跡の集中はあまりに密度が高いが，茗荷沢砦跡の「竹（館か）ノ下」，御所前砦跡の「竹ノ下」・「殿屋敷」，古御所城跡の「古御所」等の城郭関連の可能性のある地名が残



第４図　茗荷沢遺跡ほか周辺地形図（２）

ることから，今後遺構残存状況も含めた調査によって明らかになると考えられる。

当地域は，古代～近世には上埴生郡内で，17世紀末の『元禄郷帳』では「名我澤村」が見える。明治時代は迅速図（第３図）に「茗荷澤村」，西側に「竹林村」，東側に「小澤村」，南側に「佐坪村」があり，現在は長生郡長南町茗荷沢として，近隣村同様，大字名として継承される[8]。

注１　(財) 千葉県文化財センター　1999『千葉県埋蔵文化財分布地図（3）－千葉市・市原市・長生地区（改訂版）－』
２～５　長南町　1973『長南町史』，2009『続　長南町史』
６　小高春雄　1991『長生の城』私家本
７　千葉県教育委員会　1996『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房地域－』
８　角川書店　1984『角川地名大辞典12　千葉県』ほか

第２節　茗荷沢砦跡

１　遺構（第５・６図，図版２）

SK-001　確認調査トレンチで縄文土器片が多く出土した範囲を拡張した結果，地表面下約80cmで土坑が検出された。平面形は長楕円形で，短軸1.5m・長軸2.2m・深さ55cmである。覆土は赤褐色～黄褐色土で，縄文土器細片や石器片（図版２-12～14）が若干出土した。周辺や覆土出土の遺物の様相と壁面の被熱赤化などが見られなかったこと等から，炉穴ではなく，用途不明な土坑と考えられる。

２　遺物（第７・８図，図版２）

いずれも確認調査トレンチを拡張した地区で出土した縄文土器片と石器である。層位は，ローム層は存在せず，岩盤である泥岩と砂が混在した層から出土した。

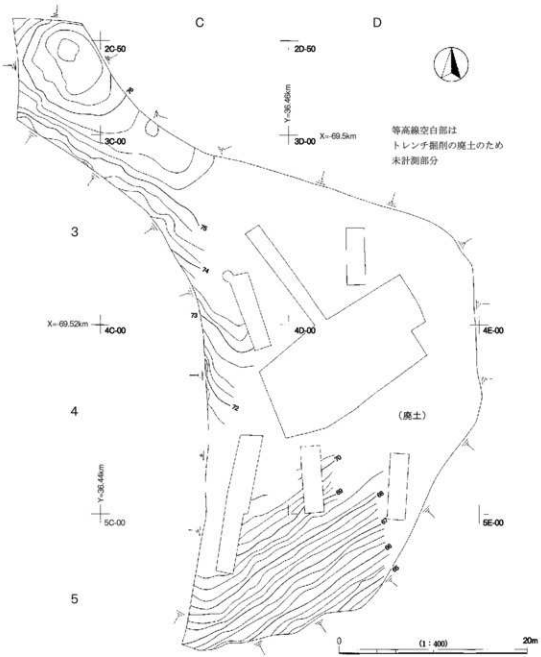
１は撚糸文が施文される早期夏島式土器，２は沈線文が施文される前期土器の口縁部，３は内外面無文で，内面にヘラなで状の痕跡がある前期黒浜式土器であろう。４は平行沈線文，５も沈線文が施文される前期諸磯式土器，６・７は斜格子状沈線文が施文され，７は底部付近の諸磯C式土器，８は貝殻複縁文が施文される前期浮島式土器，９は無文ながら胎土等からこれも前期と推定される。

石器については，10は灰色チャート製楔形石器に推定され，11はチャート製石鏃で脚部が欠損したものである。他に黒曜石製剥片が出土したので，写真のみ５点掲載した。

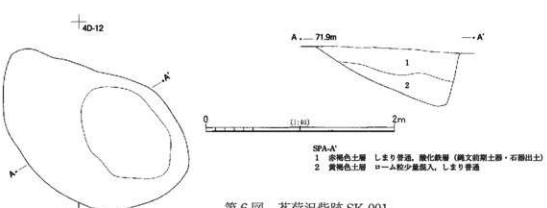
第３節　福田横穴群（第４・９図，図版３・４）

東側斜面部に２か所並んで開口した横穴周辺の清掃，斜面表土除去等を実施した結果，開口部周辺が崩落して２基に見えた１基の炭窯であることが確認された。

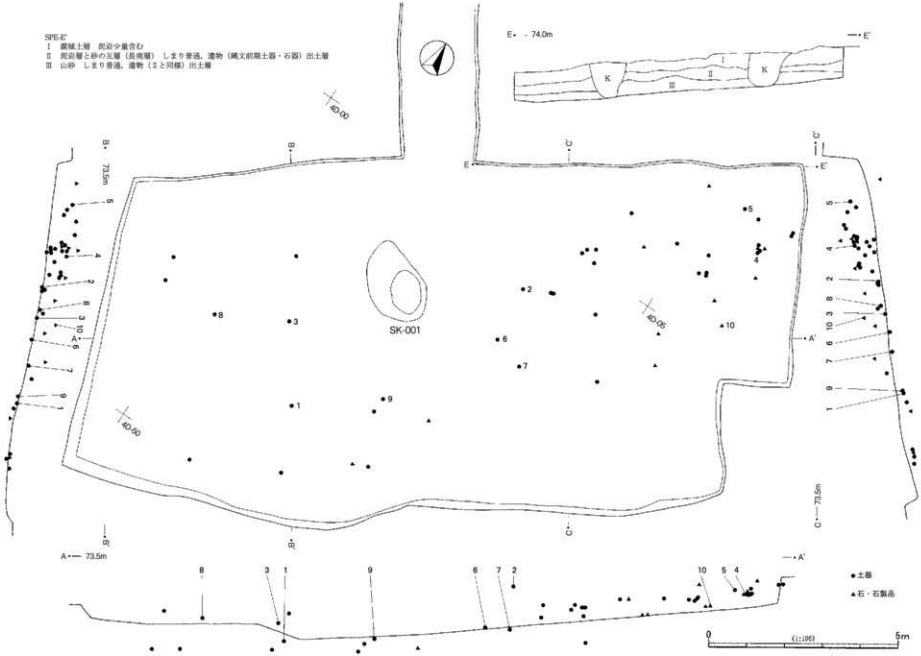
ST-001　内部の平面形は方形ではなく，開口部から左右に広がり，中ほどで奥にすぼまり，最奥部は奥に突出する。開口部幅1.6m・奥行約２m・最大幅約３m・奥部幅約1.6m，高さ約２m・最奥部高さ約1.6mである。最奥部には５cm～10cmの炭が堆積し，手前には掻き出したと推測される炭と崩落した天井部の岩盤からなる覆土が堆積していた。明らかに炭窯である。古代横穴は側壁と奥壁の角度が90°前後のものが多く，それを拡張したと仮定すれば，相当量の掘削が必要であった筈である。また，羨道部の痕跡がなく，古代の遺物が出土しなかったことから，その可能性はやはり低いものであろう。



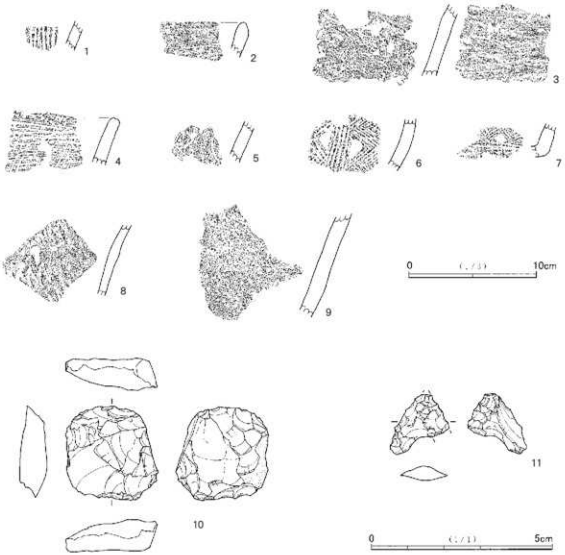
第５図　若荷沢砦跡全体図



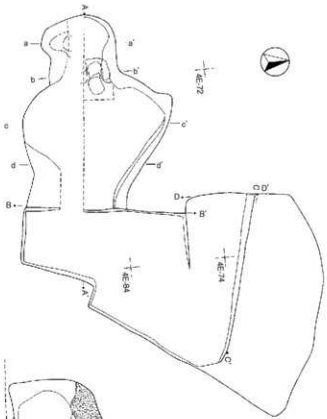
第６図　若荷沢砦跡 SK-001

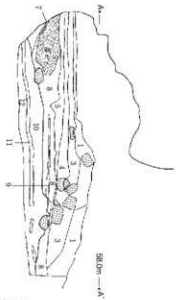


第７図　拡張区遺物分布状況

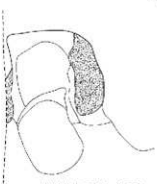


第８図　若荷沢砦跡出土遺物

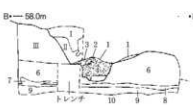




SPA-A'
1 表土層
2 泥岩ブロック
3 岩盤が混入する泥岩層
4 泥岩層（明赤色土）
5 炭褐色泥岩層　泥岩ブロック・粒混入
6 5～10cm大の炭化物堆積層
7 橙色の泥岩層
8 炭化粒混入泥岩層
9 灰褐色泥岩層（炭化粒混入）
10 泥岩層（炭褐色土）
11 橙色の泥岩層　しまり良好，鉄分混入
12 泥岩層（白褐色土）



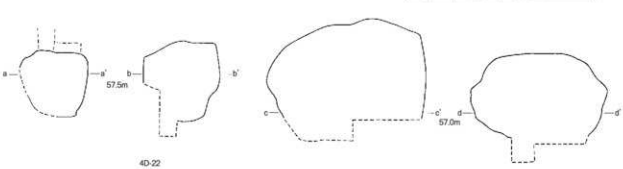
炭焼炊き口部分（1/20）



SPB-B'
1 泥岩層　赤褐色土
2 崩落した岩盤を混入する泥炭層
3 山砂層
1 泥岩層
2 泥岩ブロック（硬質）
3 炭
4 炭層
5 粘土ブロック　軟質，炭焼きによる被熱による赤黄色化か
6 山砂層　しまり良好
7 薄橙色山砂層
8 薄橙色山砂層
9 山砂層　しまり良好
10 岩盤

SPD-D'
I 赤褐色土（泥岩層と砂の互層）
II 山砂（厚さ2cm～1cmの酸化赤色粒層あり）
III 岩盤ブロック

SPC-C'
I 黄褐色土（砂と泥岩層の互層）
II 泥岩層と砂の互層（赤褐色土）　大形岩盤・岩盤ブロック点散
III 岩盤ブロック
IV 山砂（赤色泥岩層含む）



第9図　福田横穴群 ST-001

第３章　竹ノ谷横穴群

第１節　遺跡の位置と環境（第１～４図，図版１）

竹ノ谷横穴群は，若荷沢遺跡の西側の小谷津を挟んだ標高80mほどの丘陵の東側斜面部で，標高48m程に位置する。

第２節　遺構（第10図，図版５）

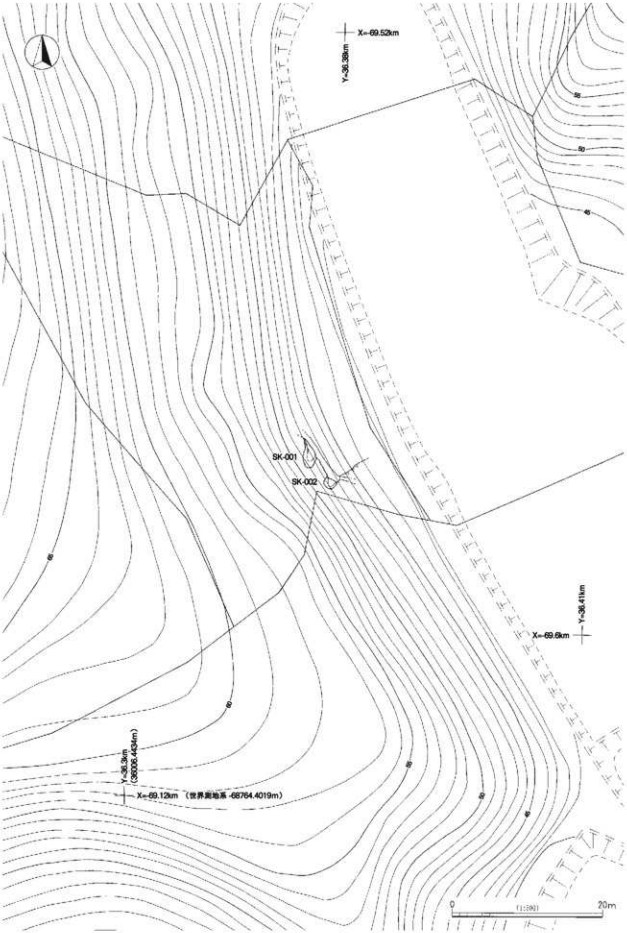
当初，斜面部に開口する２基の横穴として調査を開始したが，内部及び周辺部の清掃を実施した結果，横穴ではないことが明らかになった。

SK-001

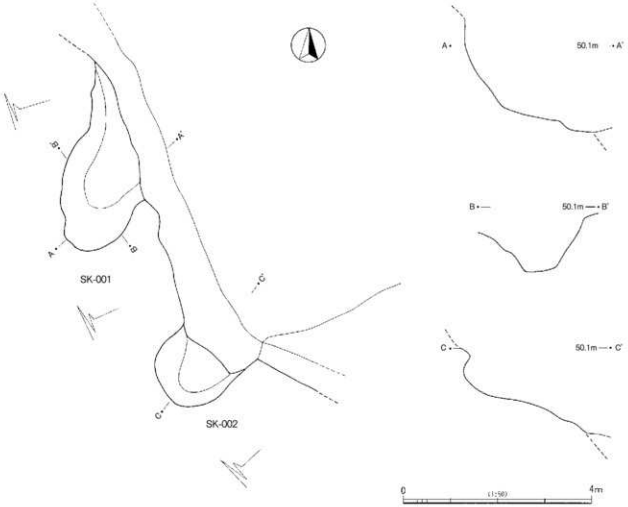
幅1.6m程・奥行2.0m～4.0mで，底面は東側に傾斜している。東側は人為的に掘削されたとみられる崖面で消失しているか，元から存在しなかった可能性もある。深さは両側の落ち込みの肩部から深い部分で約1.1mである。遺物の出土はなかった。中・近世の土坑と考えられる。

SK-002

幅約1.6m・奥行約1.4m・深さは最奥部で0.8m程である。SK-001同様，東側は消失したか，元から存在しなかった可能性がある。遺物の出土はなかった。中・近世の土坑と考えられる。



第 10 図　竹ノ谷横穴群周辺地形図



第 11 図　竹ノ谷横穴群土坑

第４章　八幡下塚群

第１節　遺跡の位置と環境（第12～14図，図版６）

本遺跡は九十九里平野西南部に面しており，東西に延びる一宮川支流の鹿島川により，鋸歯状に開析された標高50m～70m前後の細尾根状の丘陵上に位置する。水田面からの比高は25m～40mほどである。A区は丘陵の南側，B区 は180mほど離れた北側にある。尾根を挟み南北に市域が分かれており，A区は長南町に，B区は大半が茂原市に属する。

周辺地域は谷が細く，馬の背状の丘陵地で平坦な台地面がない。従って，台地上でみられるような一般的な遺跡の分布が薄い地域である。

旧石器時代は，当地域では丘陵上の立川ロームの堆積が乏しいため，現状では遺跡が確認されていない。当地域西方の標高が高い分水嶺地区では，長柄町針ヶ谷遺跡[1]や同町美佐子台遺跡[2]など旧石器を出土する遺跡が存在するので，今後丘陵上でロームの残る個所では検出される可能性はあろう。

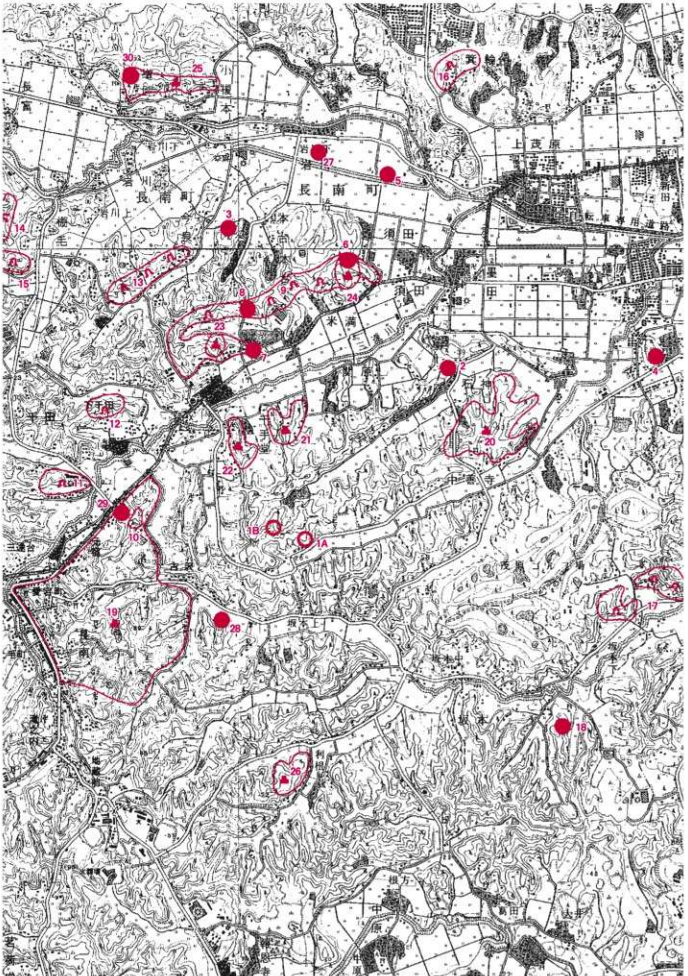
縄文時代では早期以降の遺物を出土する遺跡がある。九十九里平野際にある茂原市石神貝塚（２）[3]は中期から晩期までの貝塚として古くから知られている。長南町最西部の能見金遺跡[4]では早期から中期の遺物が出土している。一宮川の河岸沖積地にある長南町今泉遺跡（３）[5]では遺構は伴わないいものの早期～晩期までの遺物がみられる。今後，河岸の低地域に遺跡が検出される可能性が高い。

弥生時代では，鹿島川下流の丘陵地から沖積平野に移った地点の独立丘上に，学史的に著名な茂原市宮ノ台遺跡（４）[6]がある。長南町岩川遺跡第２次調査（５）[7]では溝状遺構が，今泉遺跡では河岸沖積地で遺物も出土しており，やや北へ離れるが豊田川流域の茂原市国府関遺跡[8]では竪穴住居跡や方形周溝墓の検出もある。北に２kmに位置する岩川遺跡では弥生時代後期の溝状遺構が調査されており，周辺に集落の存在が予想されている。

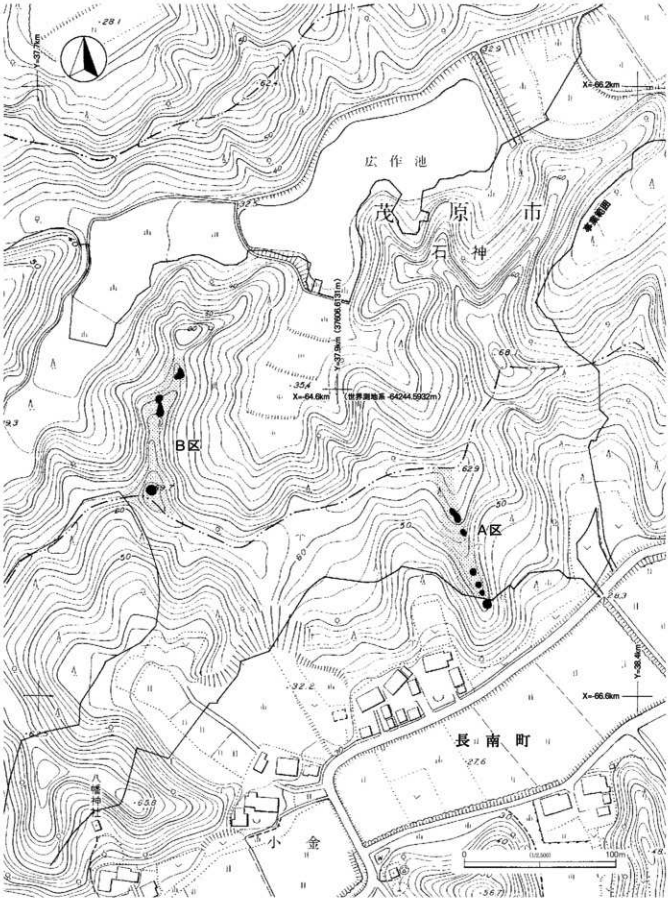
古墳に関しても分布の希薄なところである。北へ３kmほどにある米満地区では，丘陵上で円墳主体の米満古墳群（６）[9]や埴輪を出土した米満神社古墳（７）[10]が存在する。また後述する米満横穴墓群・塚群（８）の調査[11]では，横穴墓（以降「横穴」とする）に伴う墳丘としての「塚」の存在が指摘されている（報告書では「塚」と表記されているため，そのまま記す。）。遺跡南方の埴生川流域では，狭いながらも台地が存在し，能満寺古墳群[12]など台地上古墳が営まれる。北方では国府関遺跡など河岸沖積地への分布も若干検出例がある。

古墳の分布が薄いことと対照的に，遺跡の周辺地域では，古墳時代後期に営まれた横穴墓が，急斜面に集中してみられる。丘陵の下部基盤層は笠森層等の軟質砂岩が厚く堆積しており，横穴の掘削には適していたみられる。横穴の分布は，遺跡北側の三途川北岸や岩川流域に集中しており，また南側にも分布が濃い。ただし基盤層が長南層の分布域である本遺跡周辺には分布が少なく，その要因として崩落し易い地層が関係しているのではないか指摘されている。[13]

至近などころでは，当遺跡の北側1.3km地点の三途川の北岸にあたる丘陵地に米満横穴群（９）があり，横穴10基とともに，横穴の直上の尾根上にあった10基の墳丘が調査されている[14]。米満横穴群では６群133基の一大集中地域になる。また，長南城の北端部の調査でも横穴３基，墳丘３基が調査され，横穴は隣接する５基とともに池谷横穴群(10)を構成する[15]。また遺跡西側には井山横穴群(11)，吹羅横穴群（12），



第 12 図　八幡下塚群の位置と周辺遺跡



第13図 八幡下塚群周辺地形図（1）

北西には小谷横穴群(13)，鐙谷東部横穴群(14)，針ヶ谷長房・滝谷他古墳群(15)，北の一宮川北岸に箕輪横穴群(16)，東に法華谷横穴群(17) が位置する[16]。古墳時代集落については，国府関遺跡で検出されている。

奈良・平安時代に関しては，茂原地域は藻原荘の主要地域であり，耕地開発が古くから進んでいた。岩川遺跡（第２次調査）では条里痕跡が検出されている[17]。豊田川支流の茂原市国府関遺跡では台地際で弥生時代～奈良・平安時代の集落跡等が検出されている。鶴枝川流域では丘陵上の川島遺跡(18)[18] で集落が検出されている。

中世の遺跡は城館跡が多数確認されており，西側0.6kmには長南武田氏の居城である長南城（庁南城）(19)[19] があるほか，東側に1.0km離れて，連続する丘陵突端の九十九里平野に直接面して長南城に次ぐ規模を持つ石神城(20)[20] がある。長南城と石神城は細尾根を通じて繋がっており，本遺跡はそのルート上にある。また谷を挟んだ対岸には三途川に面して関原砦跡(21)，千手堂城跡(22)が近接している。しかしながら長南城以外は発掘調査されておらず，城郭地名や表面観察で比定されているので，詳細は不明である。三途川を挟んだ対岸には豊栄館跡(23)，本納城跡(24)，さらに北の一宮川北岸にに要害城跡(25) がある[21]。当遺跡南に利根里城跡(26)等が位置する。また，沖積地では，岩川遺跡の第１次調査(27)で中世の居館跡が調査されている[22]。当遺跡から南西１kmの地点にある鶴枝川最上流の田宿川間遺跡(28)[23] でも中世～近世の水田跡・畑跡や溝状遺構が検出されている。

近世では，塚が民間信仰の跡を示す代表的な遺構であるが，当地域では丘陵上に前述の長南城の塚群(29)，要害塚(30)がある程度で数が少ない。おそらく密な樹木に邪魔されて所在が見逃されているものも多いのだろう。複数の塚が並ぶものは，十三仏信仰に関係するものではないかと思われる。近隣では長柄町六地蔵地区に10基以上の塚が確認された柳作塚群がある[24]。

当地域は，古代～近世には上埴生郡内で，江戸時代はA区が坂本村，B区が石神村に属する。坂本村は，現在長生郡長南町大字坂本として「坂本上」・「坂本中」・「坂本下」・「利根里」等に区分される。A区の子字「地蔵前」は長南城落城に関わる伝承が残る地蔵が路傍にある故である。また，南西300m地点に存在する八幡神社が遺跡名に関係するようである。石神村は坂本村の北側に位置し，現在は茂原市大字石神として継承されている。B区の子字「小金谷」は鍛冶が関連する可能性も想像できる。いずれも北東方向に開く狭い谷津内に展開する耕地と村落で，調査地点はそれぞれの村の西側最奥部付近に位置する[25]。

注１　風間俊人・津田芳男　2001「千葉県長生郡長柄町針ヶ谷遺跡」『(財) 総南文化財センター調査報告第43集』
２　風間俊人　2010「長生北西部の旧石器時代遺跡群」『図説長生・夷隅の歴史』株式会社郷土出版社
佐藤達夫・戸田哲也　1976「長柄町亀ヶ谷遺跡発掘調査報告」『長柄町史－研究篇 (1)』長柄町年
菅谷通保ほか　1997「千葉県長生郡長柄町　サウザンドリーブスゴルフクラブ建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－美佐子台遺跡・倉沢台第Ⅱ遺跡・美佐子遺跡・亀ヶ谷遺跡・落井遺跡・上落井遺跡－」財団法人長生郡市文化財センター
３　鳥居龍蔵「上総国埴生郡に石器時代の遺跡あり」東京人類学雑誌　第80号　1892
川戸彰　「千葉県茂原市石神貝塚」日本考古学年報15　1967（昭和42年）
４　(財) 長生郡市文化財センター　1993『長生郡市文化財センター年報８　平成４年度』
５　津田芳男　1990『岩川・今泉遺跡』(財) 長生郡市文化財センター
６　杉原荘介　1942「上総宮ノ台遺跡調査概報－補遺－」『古代文化』13－7 日本古代文化学会
渡辺修一　2003「宮ノ台遺跡」「千葉県の歴史　資料編　考古２（弥生・古墳時代」千葉県
７　注５と同書
８　小高春男ほか　2007『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書７－長南町岩川・茂原市国府関遺跡－』
(財) 千葉県教育振興財団

第 14 図 八幡下塚群周辺地形図（2）（明治時代 1/20,000）

菅谷通保ほか　1993『千葉県茂原市　国府関遺跡群』(財) 長生郡市文化財センター
9　小高春男　2005「第２節　遺跡の位置と環境」『長南町長南城跡－一般国道409号（茂原一宮線）埋蔵文化財調査報告書－』(財) 千葉県文化財センター
10　同上
11　津田芳男ほか 1998『千葉県長生郡長南町米満横穴墓群』(財) 総南文化財センター
12　大塚初重　1949「上総能満寺古墳発掘調査報告」『考古学集刊』3
(財) 総南文化財センター　1998「総南文化財センター年報10　平成７・８年度」
13　南北方向に長南層が分布しているが，当遺跡のある地域はその範囲の北端となっている。
文献は，注９文献と同一。他に (財) 千葉県史料研究財団　1997『千葉県の自然誌 本編２ 千葉県の大地』
14　注11文献と同一
15　注９文献と同一
16　(財) 千葉県文化財センター　1999『千葉県埋蔵文化財分布地図（３）」
千葉県・長柄町教育委員会　2011『史跡長柄横穴群保存整備報告書』
17　注７文献と同一
18　津田芳男　1996『千葉県長生郡長南町川島遺跡』(財) 長生郡市文化財センター
19　注９文献と同一
小高春男 1998「長南城跡」『千葉県の歴史　資料編中世１（考古資料）』」財団法人千葉県史料研究財団
20　小高春男　1991「長生の城」
21　津田芳男　1995『千葉県長生郡長柄町　要害遺跡・要害城跡』(財) 長生郡市文化財センター
22　註5文献
笹生　衛　1998「岩川館跡」『千葉県の歴史　資料編中世１（考古資料）」(財) 千葉県史料研究財団
長南町史編纂委員会　2009『続長南町史』」長南町
23　麻生正信　2012「首都圏中央自動車道絡自動車道埋蔵文化財調査報告書15－市原市竹ノ下遺跡・関尻遺跡・山小川遺跡・長南町田宿川間遺跡－」(公財) 千葉県文化財センター
24　注16文献と同一
25　角川書店　1984『角川地名大辞典12　千葉県』ほか

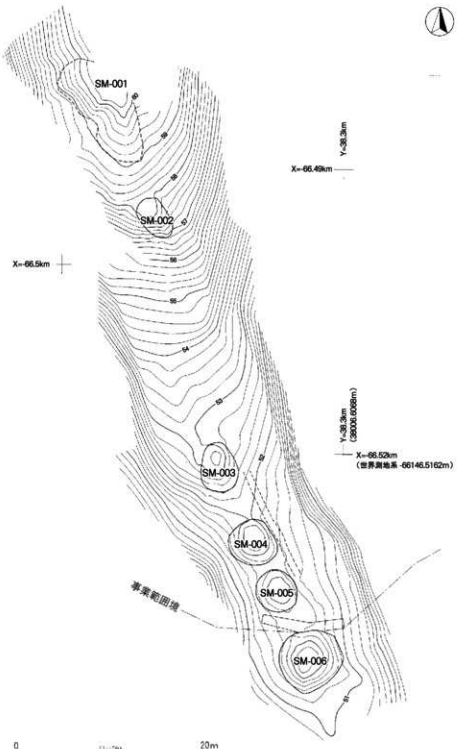
第２節　A区

茂原市・長南町の境界地点である標高62.9mの丘陵頂部から南に突出し標高60m～51mと徐々に下る細尾根上に立地する。事業範囲の現地踏査の結果，塚と推定されたものは距離70mにわたる計６基（調査区外１基を含む）で，調査区内５基について発掘調査した（第15図）。

SM-003からSM-006 の４基は並び塚である。SM-003はSM-002から続く傾斜の最下部にあり，SM-004からSM-006の３基は標高51m～52mの段丘面にある。SM-003～005の３基の東側縁辺部には，溝状の尾根道が造られている。

SM－００１（第16図，図版８）

尾根状地の最北部，58m～60mの段上にある。最標高60.4m，地山は黄褐色粘土層で，南北12.7m，東西5.0mの範囲でやや高まりが見られた。東側はかなりの部分が攪乱を受けている。裾からの見かけの高さ0.8m，中心部の高いところで黒色系の粘土質の土（泥岩質土ブロックを含む。粘土層直上土か）が0.25m（表土込みで0.3m）ほどの盛り方である。東西方向は塚状に高まっており平場がある。南北方向は緩やかに南に傾斜しているのみである。南北セクションでは南端部で地山の粘土層が削られ，段がつくようすが観察されるが，平面的には捉えられなかった。塚であるか否かは確実ではなく，近・現代の整地跡の可能性もある。なお，SM-001と002の間はテラス状を呈している。



第 15 図 A 区遺構配置図

奈良・平安時代のものとみられる土師器片が５点南側表土から出土した。

ＳＭ－００２（第16図，図版９）

SM-001から７ｍ南，001のある段から下段に向け急傾斜する部位にあり，南北4.8ｍ，東西2.9ｍの長円形の浅い盛り土を持つ塚である。頂部標高は58.2ｍを測る。裾からの比高は，南側で1.5ｍであるが，北側では0.1ｍのみである。地山の上に45cmほどの暗褐色土・黒褐色土・黒色土が載っている。

奈良・平安時代のものとみられる土師器片２点が表土から出土した。

ＳＤ－００１（第16図，図版９）

SM-001の南側の裾部分に，半径5.6ｍの弧状に廻る溝が地山（常総層上部粘土層下の砂か）上で検出された。幅50cm～70cm，深さ15cm前後で，赤色砂が覆土となっている。調査時は塚の周溝とみていたが，規模が塚よりも大きく中心も一致しないので，おそらく塚を含めた場所を区切るものか，あるいは高まりを迂回する道跡の可能性が考えられる。

ＳＤ－００２（第16・18図，第１表，図版９・16）

地山上でＬ字形の溝が検出された。幅50cm～60cm，深さ15cm前後，検出面で８世紀後半の土師器が出土した。方形周溝状遺構の可能性が考えられる。

土師器杯片が計８点あり，底部からみて２個体はあろう。１は外面が赤彩された杯の底部である。摩滅が激しい。胎土は橙褐色で赤色土粒を含む（第18図，第１表，図版16）。

ＳＭ－００３（第17・18図，第１表，図版10・16）

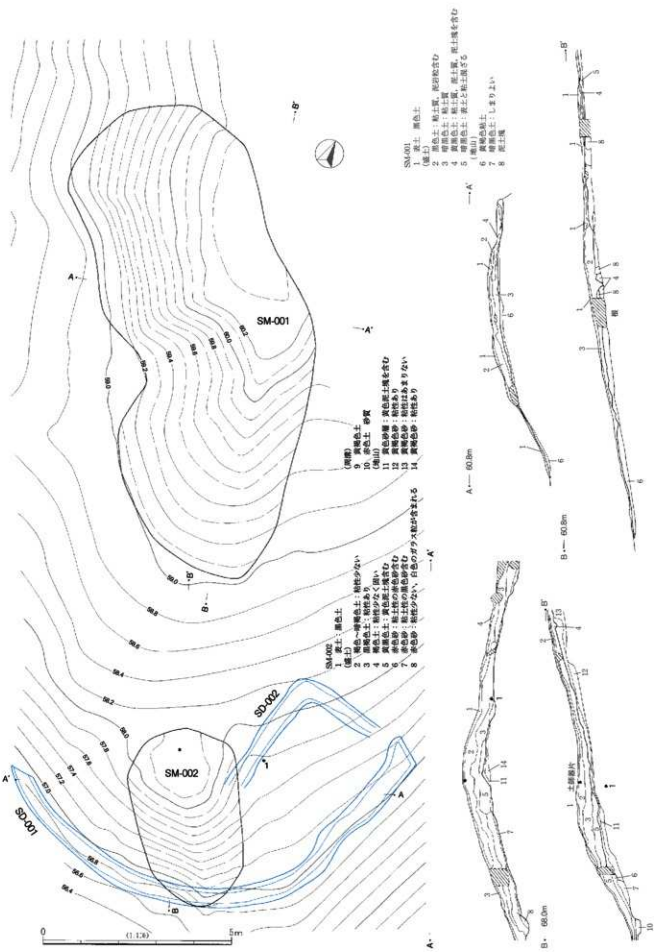
頂部標高53.2ｍで，平面形は，裾部の平坦部分を含めて南北5.9ｍ×東西4.8ｍ（見かけのマウンド部分：南北5.2ｍ×3東西.9ｍ）の楕円形をなす。見かけの高さは0.8ｍである。武蔵野ロームと思われる褐色土を地山とし，最厚0.3ｍほど褐色砂質土を盛って造られている。

塚の盛土に混入して縄文時代早期の土器が３点出土している。調査区は細尾根地で，縄文時代遺物を含む土は堆積できなかったものの，遺物だけは残置された可能性があろう。５は内削ぎの口縁部で浅い斜沈線がみられる。６は胴部片で弧状沈線を持つ。胎土は微細砂を含む。７は無文である（第18図，第１表，図版16）。

ＳＭ－００４（第17・18図，第１表，図版11・16）

頂部標高52.4ｍで，平面形は裾部の平坦部分を含めて南北6.6ｍ×東西5.5ｍ（見かけのマウンド部分：南北4.9ｍ×東西4.7ｍ）の不整楕円形をなす。実際は一回り小さい。見かけの高さは0.7ｍである。常総粘土層を地山とし，褐色砂質土を0.5ｍほど積んでいる。木根の攪乱が多く層が乱れている個所がある。

盛土下から無文縄文土器片１点，盛土中で近世（18世紀代）の陶磁器が出土している。従って，造立時期は18世紀代以降であろう。２は信楽産灰釉の小皿で灯明具である。径8.1cm，高さ2.9cmを測る。芯を出すための口縁を打ち欠いた部分が３か所ある。内外面にスス跡が見られる。18世紀代のものとみられる。３は瀬戸・美濃産の灰釉菊皿で，縁に濃い釉薬が垂れている部分がある。17世紀後半のものである。４



第 16 図 A 区 SM-001・002 平面図・土層断面図

は 肥前産の青磁折縁皿で，口縁で外側に，「く」の字に屈曲する。17世紀代のものと推定される（第18図，第１表，図版16）。

ＳＭ－００５（第19図，図版11）

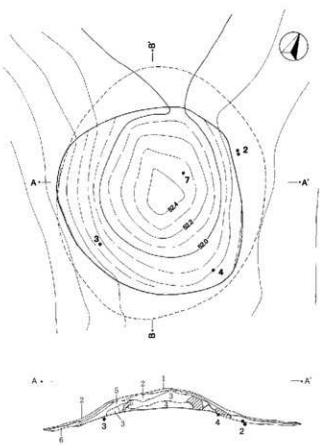
頂部標高52.2mの高さで，平面形は裾部も含めて南北6.1m×東西5.5m（見かけのマウンド：南北4.5m×東西4.2m）の円形をなす。現状高さ0.6mほどになる。粘土層を地山とする高まりの上に，0.3m弱の盛土を積んでいる。

土師質土器の破片とみられるものが若干出土している。

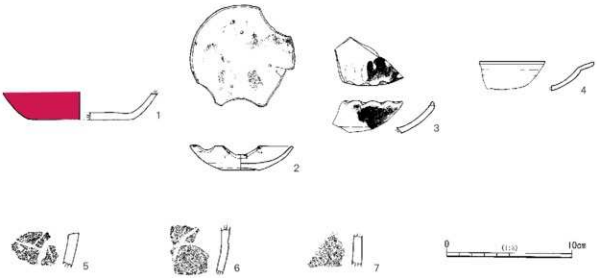
ＳＭ－００６（第19図，図版11）

並び塚の南端にある。事業範囲外であり，現状観察と地形測量のみ行った。

頂部標高52.3mであり，平面南北6.2m×東西6.6mのほぼ円形をなす。1.0mほどの高さがある。頂部には径２mほどの平坦部がある。調査区境のSM-005 との間にトレンチを入れたが，周溝は検出されなかった。



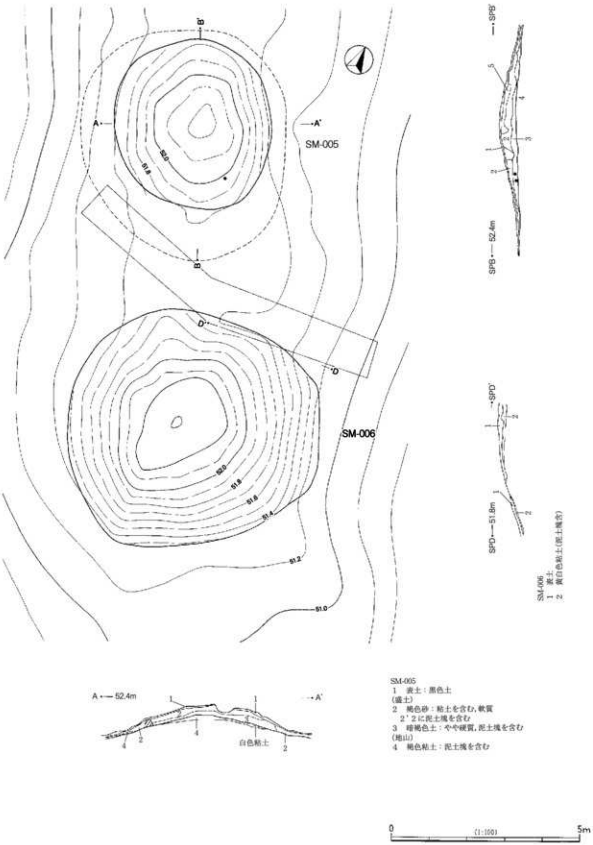
第 17 図 A 区 SM-003・004 平面図・土層断面図



第 18 図　A 区出土土器類

第 1 表　A区出土土器類観察表

挿図番号	遺　構	遺物番号	種　別	器　種	遺存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	成形・調整	色　調	胎　土	備　考
18図-1	SD-002	1	土師器	坏	破片	－	8.3	〔2.2〕	内外：ナデ 底：手持ちケズリ 赤彩	橙褐色	スコリア	
18図-2	SM-004	32,148	陶器	灯明皿	4/5	8.1	2.9	1.9	ロクロナデ 底：回転ケズリ 灰釉	淡黄褐色		信楽産，打ち欠き3個所，スス跡,18世紀代
18図-3	SM-004	134	陶器	菊皿	破片	－	－	－	ロクロナデ 口唇：刻み、口縁 内面上端：凹線 灰釉	灰 白 色、 淡緑色釉		瀬戸・美濃産,17世紀後半
18図-4	SM-004	161	磁器	折縁皿	破片	－	－	－	ロクロナデ 青磁釉	灰緑色	緻密	肥前産,18世紀代
18図-5	SM-003	1	縄文土器	深鉢	破片	－	－	－	ナデ	明褐色	細砂	早期沈線文系土器 内削口縁
18図-6	SM-003	1	縄文土器	深鉢	破片	－	－	－	弧線　風化激しい	明褐色,8点	細砂	早期沈線文系土器
18図-7	SM-004	31	縄文土器	深鉢土器	破片	－	－	－	外：不明 内面：ナデ	灰褐色	微細砂	早期土器



第 19 図 SM-005・006 平面図・土層断面図

第３節　Ｂ区

ＳＭ－００１（第21・23図，第２表，図版12・13・17）

裾部が一辺８ｍほどの隅の丸い正三角形の平面をなし，0.6ｍほどの高まりを持つ。頂部に径3.0ｍほどの平坦な部分がある。三角形尾根状地の最北部，最高標高61.8ｍの赤褐色砂層の高まりの上に20㎝～30㎝の粘土層が載る。塚の盛り土であるか明確ではない。土層堆積観察でも急激な盛り上がりは認められないので，上部常総粘土層を地山とする自然の高まりとみられる。しかし，高まりを塚と記載していた可能性もある。

遺物は，南側の裾部表土で中国北宋銭が１点出土している。１は元祐通寶で，初鋳は元佑元（1086）年である（第23図，第２表，図版17）。

ＳＭ－００２（第12・23図，第２表，図版12～14・17）

SM-001の南西約20ｍ離れて，尾根状に南北に延びる撥形をなす塚状の高まりが認められたため調査を行った。北側の撥の先端部をＳＭ－００２（１），南側の柄部を同（２）とした。

北側（１）は頂部標高64.6ｍの高さで，南北6.6ｍ，東西4.7ｍの楕円形を呈し，見かけの高さ1.0ｍである。表土直下で地山の褐色粘土層（常総粘土層）が検出されて盛土は認められず，自然地形とみられる。

南側（２）は，（１）から南へ長さ9.4ｍ×幅4.0ｍ～5.0ｍの長円形の範囲で連なる。最高標高64.3ｍの高さであり，0.8ｍほどの見かけの高さがあった。土層の状況は（１）と同じである。尾根に形成された自然地形とみられる。

遺物は，（１）の南側裾からややはずれた，（２）の頂部北端の表土上で，寛永通宝が出土した。２は背波４文銭である。明和６（1769）年，江戸深川での初鋳が推定されるものである（第23図，第２表，図版17）。

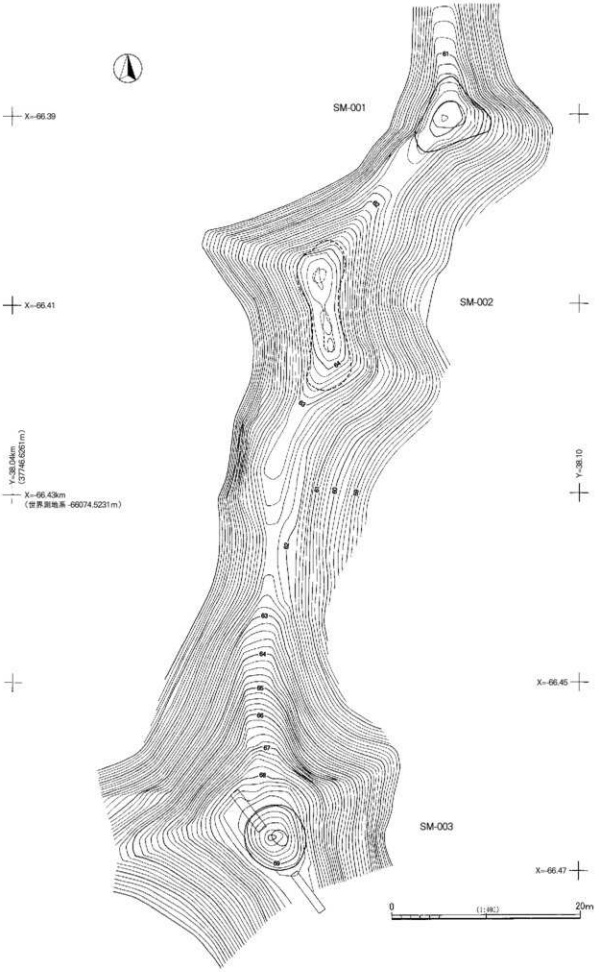
銭貨の出土から，高まりを塚として認識されていた可能性もあるが，盛土が存在しないことから，本報告書では，遺構としては捉えないこととする。

ＳＭ－００３（第24・25図，第３表，図版10・16・17）

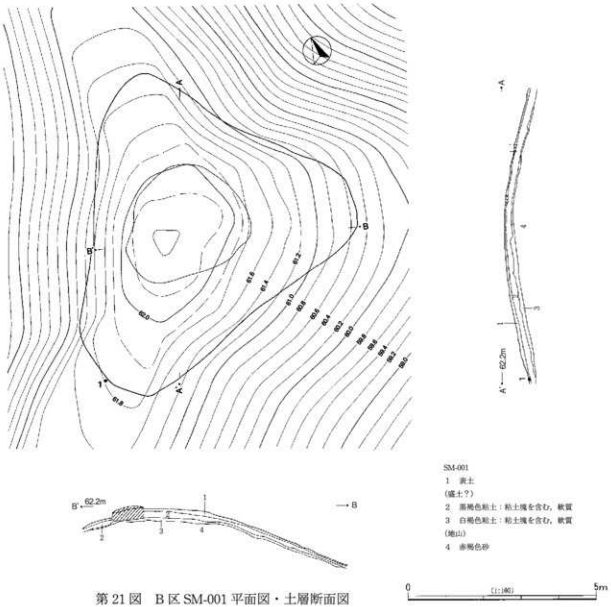
平面形は，マウンド範囲で7.1ｍ× 6.4ｍの南北にやや長い円形ながら整った形を呈す。頂部標高69.9ｍの高さがあり，平坦部は狭い。裾部の一回り広い範囲（11.8ｍ×10.4ｍ）がテラス状を呈する。最下端からの高さ1.5ｍ，中段裾からは1.2ｍである。武蔵野ローム層下部の地山の広い高まりを成形して基盤とし，その上に50㎝ほど褐色砂質土を盛って塚としているようである。下段には流れた土が堆積している。

出土遺物（第25図，第３表，図版16・17）

北部の裾斜面付近で多数の近世陶磁器・砥石・硯等が出土している。主に表土中及び地表面である。１は筒高台の肥前産染付筒形猪口で，竹文がみられる。２は瀬戸・美濃産染付磁器の高台付き猪口で，発色の良い青と緑の縦線文様がみられる。底裏に銘がある。19世紀代のものである。３は肥前産染付筒茶碗である。山水文がみられる。18世紀後半のものである。４は外面菊花文と斜格子文を施された肥前産染付筒茶碗で，18世紀後半のものである。見込みに印花文が入る。５は肥前産筒茶碗片で，外面青磁釉がかかる。内面上端に斜交差の染付文様がある。18世紀末～19世紀初頭のものである。６は肥前産染付碗である。草木文がみられる。釉が白濁し，文様の出が悪い。17世紀代のものである。７は肥前産くらわんか手の厚手茶碗である。胎土が灰色かかっており，染付の発色も良くない。底裏に川の字の銘がある。18世紀代のも



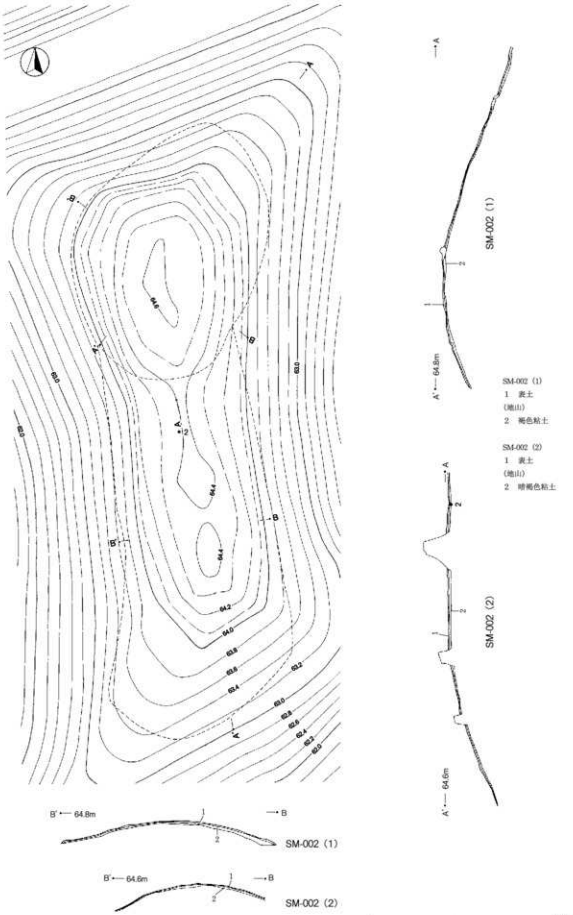
第 20 図 B 区遺構配置図



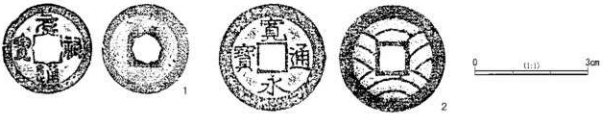
第 21 図　B 区 SM-001 平面図・土層断面図

のである。8は瀬戸・美濃産染付湯飲み茶碗である。草木文がみられる。19世紀代のものである。9は肥前産磁器である。染付の二重網目文を持つ。18世紀代である。10は瀬戸・美濃産染付磁器で，先反り碗とみられる。草木文がみられる。19世紀代のものである。11は肥前産端反染付茶碗である。植物文が見られる。内面口縁上端に帯施文がある。12は型紙染付の丸碗で，瀬戸・美濃産である。19世紀後半（近代）のものとみられる。13は型紙染付の丸碗で，瀬戸・美濃産である。19世紀後半（近代）のものとみられる。

14は鉄絵風水文様を持つ益子系陶器の土瓶片である。透明釉がかかる。持ち手の付く耳の基部が一部分残っている。18世紀後半～19世紀代になる。15は細かい貫入を持つ灰釉の瀬戸・美濃産陶器で，短い筒型をなす。1/2が残存している。鉄絵の渦巻き文スタンプ施されている。底部は環状の台が付されて揚げ底を呈している。口唇は擦れて，釉が剥げている。蓋による擦れであろうか。香炉ないし線香立て具であろう。16は瀬戸・美濃産灰釉徳利片で，18世紀後半～19世紀前半のものである。17は小形の陶器徳利で，灰釉に細かい貫入が入る。瀬戸・美濃産で，18世紀後半～19世紀前半のものである。18は堺産の擂鉢小片で，1



第 22 図　B 区 SM-002 平面図・土層断面図



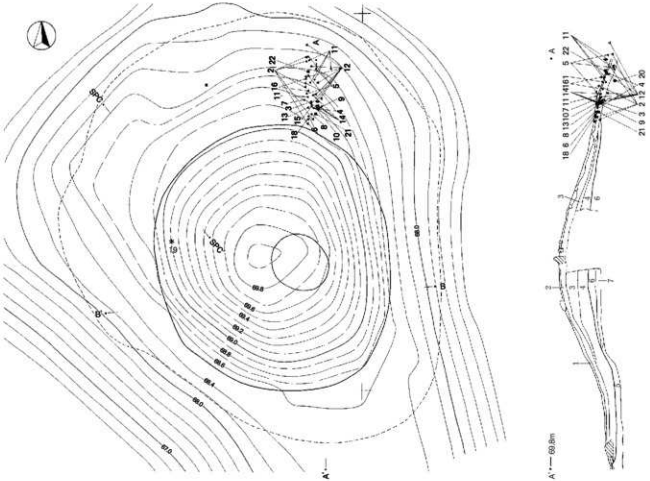
第23図 B区SM-001・002出土銭貨

点のみの出土である。縦に鋭い線刻が密に入る。胎土に白色礫が目立つ。18世紀～19世紀代のものである。

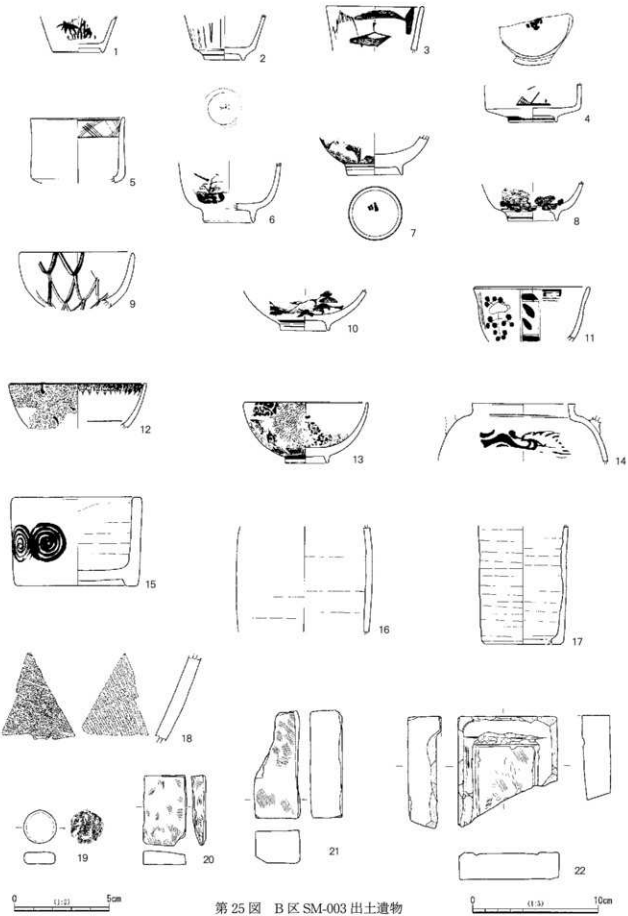
19は小円盤状の泥面子である。径1.7cm・厚さ0.6cmを測る。不明瞭ながら型押し様の文様がある。

20は白色凝灰岩の小形砥石である。長さ5.6cm・幅3.3cm・厚さ1.1cmのほぼ完形品である。長期間使用されたためかて薄くなっている。裏面と一側面に製作時の粗割りノミ跡がある。21は断面方形の砥石で，長さ8.5cm・幅3.6cm・厚さ2.6cmである。一部粗割の跡が残る。使用により少し厚さが減っている。22は砂岩製の長方形硯である。陸から波止部分の半欠品である。現存長8.7cm・幅7.8cm・厚さ2.7cmを測る。外形の一回り内側を角のみで方形に線引きして内側をすり面としている。縁の上部を打ち欠いている。側面が軽く摩滅しているので，砥石として再使用しているとみられる。

その他，図示はしないが，平瓦の角の部分でとみられるいぶし瓦破片がある。瓦の普及する18世紀以降のものであろう。また外面が白色に風化した大型のチョウセンハマグリの左殻が1点出土している。



第 24 図　B 区 SM-003 平面図・土層断面図



第 25 図　B 区 SM-003 出土遺物

第２表　B区出土銭貨計測表

挿図番号	遺構名	遺物番号	銭種	書体	生産地	初鋳年（西暦）	外縁外径(mm)		外縁内径(mm)		内郭外径(mm)		内郭内径(mm)		外縁厚(mm)	内面厚(mm)	量目(g)	備考
							縦	横	縦	横	縦	横	縦	横				
23図-1	SM-001	1	元頒通寶	篆書	中国	元佑元年	1086	23.8	23.8	19.5	19.5	9.1	8.9	7.7	7.7	1.1	0.7	3.29	背文なし
23図-2	SM-002	1	寛永通寶	真書	武蔵国江戸深川千田新田か	明和6年	1769	28.4	28.4	21.8	22.0	8.2	8.2	6.5	6.8	1.1	0.7	4.50	背波

第３表　B区SM-003出土陶磁器観察表

挿図番号	遺構	遺物番号	種別	器種	遺存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形・調整	色調	胎土	備考
25図-1	SM-003	7	磁器	染付猪口	1/3	－	3.9	(2.9)	ロクロナデ 外：竹文 筒高台	内外：くすんだ白色	緻密	瀬戸・美濃産，17世紀後半
25図-2	SM-003	1，6，12，14，51	磁器	染付猪口	1/2	(6.4)	4.8 台3.2	(3.5)	ロクロナデ 内：縦刻線 透明釉	白色	緻密	瀬戸・美濃産，19世紀代
25図-3	SM-003	29	磁器	染付筒茶碗	1/5	7.7	－	(3.5)	ロクロナデ 外：山水文 透明釉	くすんだ白色	緻密	肥前産，18世紀後半
25図-4	SM-003	17，35	磁器	染付筒茶碗	1/4	－	3.9	(2.9)	ロクロナデ 外：菊花文，斜格子文 見込：印花文 透明釉	くすんだ白色	緻密	瀬戸・美濃産，19世紀後半
25図-5	SM-003	4，16，45	磁器	染付筒茶碗	1/4	7.4	7.4	(5.1)	ロクロナデ 外：青磁釉 内：上端帯筈文，透明釉	外：緑白色 内：灰白色	緻密	18世紀末から19世紀初頭，肥前産
25図-6	SM-003	32	磁器	染付碗	破片	－	台4.0	(4.8)	ロクロナデ 外：草木文 白高台	くすんだ白色	緻密	肥前産，17世紀代
25図-7	SM-003	25	磁器	染付厚手茶碗	1/5	(8.7)	台4.4	(3.0)	ロクロナデ 外：草花文　裏：銘 透明釉	灰白色	緻密	肥前産，18世紀代
25図-8	SM-003	31	磁器	染付湯飲み茶碗	破片	－	台4.0	(3.0)	ロクロナデ 外：草木文 透明釉	白色	緻密	瀬戸・美濃産，19世紀代
25図-9	SM-003	39	陶器	染付厚碗	破片	9.1	－	(4.3)	ロクロナデ 外：二重網目文 透明釉	くすんだ白色	緻密	肥前産・18世紀代
25図-10	SM-003	30	磁器	染付先反り碗	破片	－	台3.8	(3.1)	ロクロナデ 外：草木文 透明釉	白色	緻密	瀬戸・美濃産，19世紀代
25図-11	SM-003	5	磁器	染付端反茶碗	1/5	9.2	－	(4.1)	ロクロナデ 外：植物文 内：上端帯筈文 透明釉	くすんだ白色	緻密	肥前産
25図-12	SM-003	15，19，21，38，40，42，44，47，49	磁器	染付丸碗	1/3	10.9	－	(3.6)	ロクロナデ 外：型紙染付 透明釉	くすんだ白色	緻密	瀬戸・美濃産，19世紀後半
25図-13	SM-003	26	磁器	染付丸碗	2/3	9.6	台3.1	4.8	ロクロナデ 外：型紙染付 透明釉	ややくすんだ白色	緻密	瀬戸・美濃産，19世紀後半
25図-14	SM-003	27，36，46，48	陶器	土瓶	破片	8.1	－	(4.5)	ロクロナデ 外：鉄絵風水文，耳貼付 透明釉	灰白色		益子系，19世紀代
25図-15	SM-003	50	陶器	香炉？	破片	9.5	9.4	7.0	ロクロナデ 外：鉄絵渦巻文，口唇摩耗 灰釉	灰白色		瀬戸・美濃産
25図-16	SM-003	8，9	陶器	徳利	破片	(10.7)	－	(8.3)	ロクロナデ 灰釉	オリーブ黄色		瀬戸・美濃産，18世紀後半から19世紀前半
25図-17	SM-003	13，41，43，54	陶器	徳利	破片	(7.2)	6.0	(9.3)	ロクロナデ 灰釉	淡黄色		瀬戸・美濃産，18世紀後半から19世紀前半
25図-18	SM-003	2	陶器	擂り鉢	破片	－	－	－	ロクロナデ 柿釉・縦刻線	茶褐色	白色礫	堺産，18世紀から19世紀代

第４表　B区SM-003出土土製品・石製品観察表

挿図番号	遺構	遺物番号	製品名	材質	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
25図-19	SM-003	24	泥面子	土師質	完存	1.7	1.7	0.6	1.76
25図-20	SM-003	34	砥石	凝灰岩	3／4	8.5	3.6	2.6	122.35
25図-21	SM-003	22	砥石	凝灰岩	ほぼ完形	5.6	3.3	1.1	34.50
25図-22	SM-003	11	硯	砂岩	1／2	(8.7)	7.8	2.7	204.85

第５章　まとめ

茗荷沢遺跡

茗荷沢砦跡

中世城館跡とされている範囲の中央部で標高の高い地区を含む事業範囲であったが，中世の遺構・遺物とも検出されず，確認調査の結果，縄文時代早期～前期の遺物と前期土坑が検出された。南側に隣接する皇産霊神社は迅速図では「大六天」と記載されていることから，古くからの神社で境内部分が平坦であるが，境内部分の他に，空堀・土塁や斜面部の腰曲輪等の城郭遺構が不明確であり，城館跡でない可能性も考えられる。

福田横穴群

東側斜面部に２か所並んだ様に見えた横穴は，１基の横穴開口部の天井等の崩落による埋没で，近世・近代炭窯であることが確認されたが，古墳時代横穴を改造した可能性も考えられる。古代遺物は出土しなかったが，事業範囲外に横穴が確認される可能性もあることから，古墳時代横穴再利用の否定は控えておきたい。

竹ノ谷横穴群

丘陵東側斜面部に２基の穴が検出された。いずれも浅いもので，遺物も出土せず，古墳時代横穴ではなく，中・近世の土坑とみられる。

八幡下塚群

事業範囲内の内，丘陵頂部に連続して並ぶ塚状の高まり群の内，東方の長生郡長南町に属する範囲をA区，西方の茂原市に属する範囲をＢ区として調査した。

Ａ区では直径５ｍ～６ｍの塚５基が尾根上に並び，塚の盛土下から，古墳時代末期から奈良・平安時代の墳墓の一種である方形周溝遺構と推測される溝が検出され，塚裾部からは中・近世の溝状遺構も検出された。後者は塚への参拝用道路跡である可能性も考えられる。遺物は，縄文土器・古代土師器片・中近世陶磁器等である。縄文土器片の存在はその理由が不明であるが，土師器片は方形周溝遺構との関連が考えられる。或いは，塚の盛り土を丘陵下の平地から運んだ際に混入した可能性も考えられる。

Ｂ区では直径６ｍ～８ｍの２基の中・近世の塚が確認された。銭貨以外の中・近世遺物は，破片が一箇所に集中して出土したことから，塚への参拝路から廃棄されたことが想像できる。

本報告書作成にあたり参考とした，近世遺物編年資料等は下記のとおりである。

陶磁器類

豊島区遺跡調査会 1998「陶磁器・土器　分類・計数基準」『伝中・上富士前Ⅱ』別冊

銭貨

小川浩編　1972『寛永通寶銭譜』日本古銭研究会

写　真　図　版

図版1

若荷沢遺跡・竹ノ下横穴群周辺航空写真（1978年）

図版2

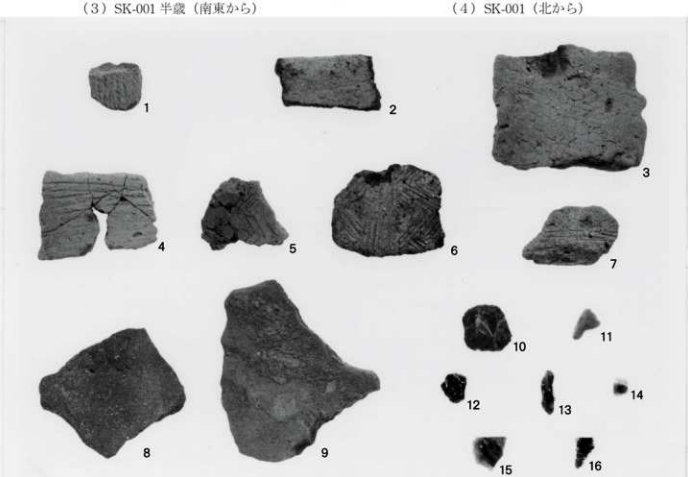
茗荷沢遺跡（茗荷沢砦跡）

（1）調査前（南から）

（2）拡張区土層・遺物出土状況（南西から）

（3）SK-001 半歳（南東から）

（4）SK-001（北から）



（5）出土遺物

茗荷沢遺跡（福田横穴群）

（1）調査前（東から）

（2）周辺伐採・清掃後（南東から）

（3）調査前内部

（4）北側隣接区トレンチ（東から）

（5）北側隣接区トレンチ内Dライン土層（東から）

（6）北側隣接区トレンチ内Cライン土層（南から）

（7）ST-001 前トレンチ内Bライン土層（南東から）

（8）ST-001 前トレンチ内Aライン土層　入口付近（東から）

茗荷沢遺跡（福田横穴群）

（1）ST-001 全景
（北東から）

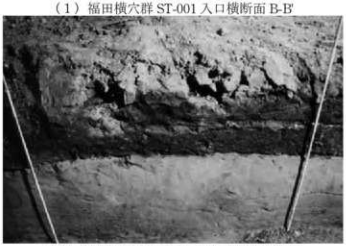
（2）ST-001 近景
（北東から）

（3）ST-001 奥炭化物堆積
（東から）

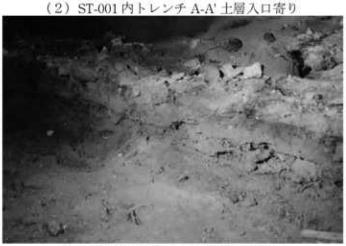
茗荷沢遺跡（福田横穴群）・竹ノ下横穴群

（1）福田横穴群 ST-001 入口横断面 B-B'

（2）ST-001 内トレンチ A-A' 土層入口寄り



（3）ST-001 内トレンチ A-A' 土層中央付近



（4）ST-001 内トレンチ A-A' 土層奥

（5）竹ノ下横穴群 調査風景

（6）竹ノ下横穴群 全景（北から）

（7）SK-002

（8）SK-001

图版6

八幡下塚群遺跡周辺航空写真（1972年）

八幡下塚群 A区

（1）A区遠景（北西から）

（2）A区調査前近景
（北東から）

（3）A区南側地点調査前近景
（北東から）

八幡下塚群 A区

（1）SM-001 調査前
（北東から）

（2）SM-001 盛土状況（1）
（南から）

（3）SM-001 盛土状況（2）
（北から）

八幡下塚群 A区

（1）SM-002 調査前
（北東から）

（2）SM-002 盛土状況
（北東から）

（3）SM-002 盛土状況（1）
（北西から）

（4）SM-002 盛土状況（2）
（南東から）

（5）SD-001・002
（北西から）

八幡下塚群 A区

（1）SM-003 調査前
（南東から）

（2）SM-003 盛土状況
（北西から）

（3）SM-004 調査前
（北から）

八幡下塚群 A区

（1）SM-004 盛土状況
（北から）

（2）SM-005 調査前
（北東から。奥は SM-006）

（3）SM-005 盛土状況（1）（北から）

（4）SM-005 盛土状況（2）（北西から）

図版12

八幡下塚群 B区

（1） B区調査区遠景
（南東から）

（2）SM-001（奥）・SM-002
（手前）
調査前近景（南から）

（3）SM-001 調査前
（北から）

八幡下塚群 B区

（1）SM-001 堆積状況（1）（北から）

（2）SM-001 堆積状況（2）（西から）

（3）SM-001 盛土除去後（北から）

（4）SM-002 調査前（北から）

八幡下塚群 B区

（1）SM-002 北側堆積状況（東から）

（2）SM-002 南側堆積状況（北東から）

（3）SM-002 北側表土除去後（西から）

（4）SM-002 南側表土除去後（西から）

（5）SM-003 調査前
（南西から）

八幡下塚群 B区

（1）SM-003 遺物出土状況
（北から）

（2）SM-003 盛土状況 南北土層北半（北西から）

（3）SM-003 盛土状況 南北土層南半（1）（南西から）

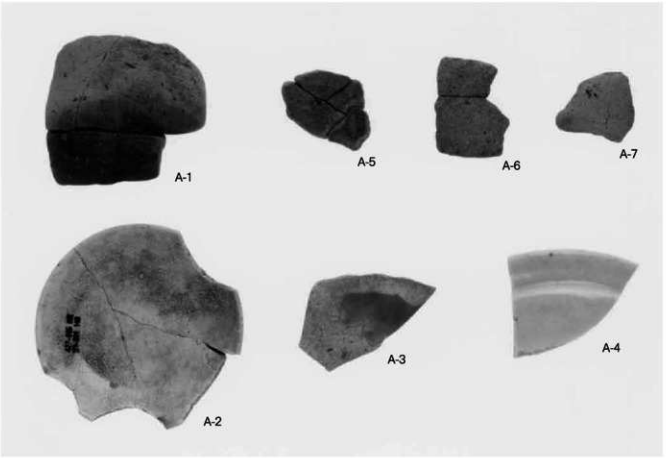
（4）SM-003 盛土状況 南北土層南半（2）（南西から）

（5）SM-003 東西土層東半（南西から）

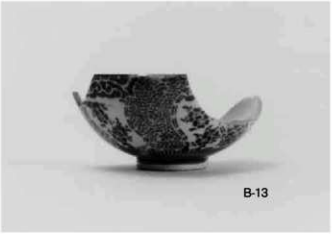
（6）SM-003 盛土除去後全景
（北から）

図版16

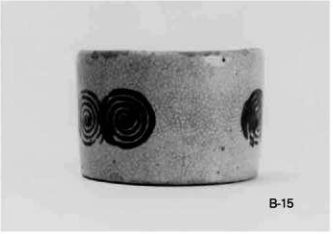
八幡下塚群 出土遺物1



（1）A区出土遺物

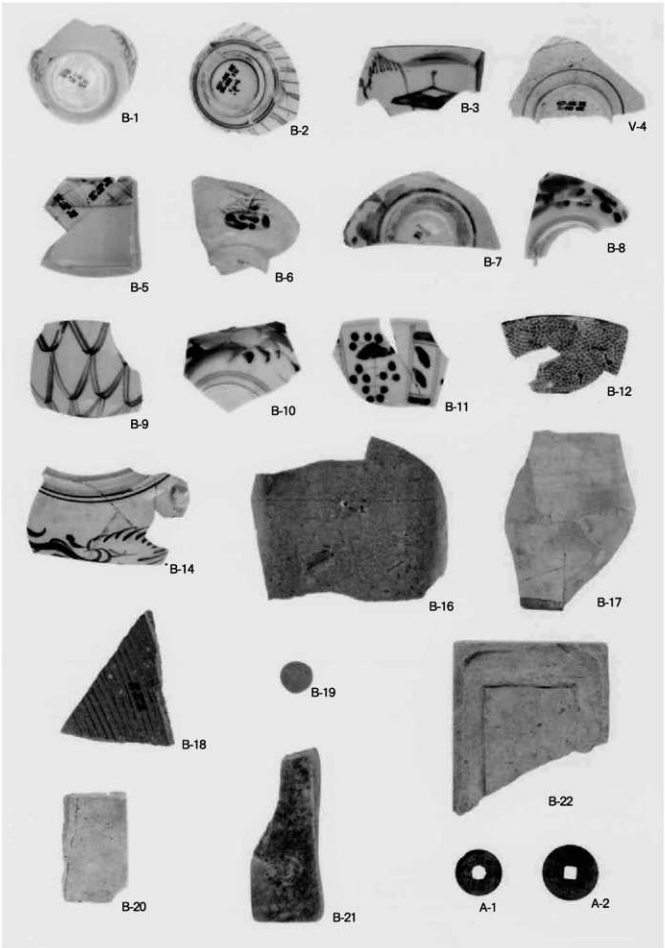


（2）B区出土磁器碗



（3）B区出土陶器鉢

八幡下塚群 出土遺物2


B-1
B-2
B-3
V-4
B-5
B-6
B-7
B-8
B-9
B-10
B-11
B-12
B-14
B-16
B-17
B-18
B-19
B-22
B-20
B-21
A-1
A-2

報告書抄録

ふりがな	しゅとけんちゅうおうれんらくじどうしゃどうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書
副書名	長南町茗荷沢遺跡・竹ノ谷横穴群，茂原市・長南町八幡下塚群
巻次	30
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第756集
編著者名	井上哲朗・田村　隆
編集機関	公益財団法人　千葉県教育振興財団
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の2　　TEL　043（424）4848
発行年月日	西暦2016年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
茗荷沢遺跡 （茗荷沢砦跡）	長生郡長南町茗荷沢 232-1ほか	427	004	35度 22分 33秒	140度 13分 53秒	20080916 ～ 20081107	7,500㎡	道路建設に伴う埋蔵文化財調査
茗荷沢遺跡 （福田横穴群）	同　上	427	005	35度 22分 33秒	140度 13分 54秒		横穴1	
竹ノ谷横穴群	長生郡長南町茗荷沢 字竹ノ谷456-4	427	008	35度 22分 32秒	140度 13分 49秒	20100317 ～ 20100318	1,500㎡	
八幡下塚群 A区	長生郡長南町坂本字 地蔵前3348-2番地ほか	427	006A	35度 24分 11秒	140度 15分 6秒	20081110 ～ 20081218	1,700㎡ 塚5	
八幡下塚群 B区	茂原市石神字小金谷 23番地ほか	427	006B	35度 24分 14秒	140度 14分 58秒	20081219 ～ 20090213	2,000㎡ 塚2	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
茗荷沢遺跡 （茗荷沢砦跡）	集落 城館跡	縄文時代 中世	土坑　1基	縄文時代土器・石器	縄文時代前期の遺物群と土坑
茗荷沢遺跡 （福田横穴群）	横穴	古墳時代	横穴　1基		古墳時代横穴は，近世炭窯として再利用された可能性がある。
竹ノ谷横穴群	集落	中・近世	土坑　2基	なし	
八幡下塚群 A区	包蔵地 墓 塚	縄文時代 古墳時代～奈良・平安時代 中・近世	方形周溝　1基 塚　5基 溝　1条	縄文土器 土師器 陶磁器・土器・土製品・石製品	直径5m前後の塚5基が尾根上に並んで検出された。
八幡下塚群 B区	塚	中・近世	塚　2基	陶磁器・土器・銭貨	直径7m前後の塚2基が尾根上に検出された。

要　約

茗荷沢遺跡は，台地上の茗荷沢砦跡，東側斜面部の福田横穴群の2地点が調査された。茗荷沢砦跡は，中世の遺構・遺物は検出されず，縄文時代前期の遺物群と土坑が検出された。福田横穴群は，古墳時代横穴を再利用した近世炭窯とみられる。

竹ノ谷横穴群は，古墳時代横穴墓として調査した結果，斜面に造られた中・近世の土坑であった。

八幡下塚群は，標高50m～70mの細尾根状丘陵上に立地し，東調査区（長南町）をA地点，西調査区（茂原市）をB地点として調査された。並び塚を呈しており，十三塚の類とみられる。また，塚盛土下から古代の方形周溝状遺構が検出された。

千葉県教育振興財団調査報告第756集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書30

－長南町茗荷沢遺跡・竹ノ谷横穴群，茂原市・長南町八幡下塚群－

平成28年３月25日発行

編　　集　公益財団法人　千葉県教育振興財団

発　　行　国土交通省　関東地方整備局
千　葉　国　道　事　務　所
千葉市稲毛区天台５丁目27番１号
公益財団法人千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の２

印　　刷　三陽メディア株式会社
千葉市中央区浜野町1379